

仕事人秘録

川崎氏は28歳のときに交通事故に見舞われた。その経験がその後の人生を大きく変えた。

幼い日の思い出や私に大きな影響を与えた両親の話をする前に、私の体のことを話しておきたい。私が培ってきた強い闘争心とも無縁ではないからだ。

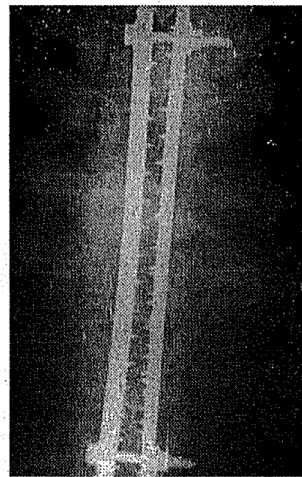
私の体のレントゲン写真にはステンレス製の板がポルトナットで背骨に固定されているのが見える。事故の直後、救命のため急いで手術をした痕跡だ。私の体の奥に残る異物を見ると、ずいぶん荒っぽい手術をされたものだと思う。

私は淡麗なモノを作り、機能美を実現するデザイナー

未来の予感を形に ②

工業デザイナー

川崎 和男氏



川崎氏の背骨にはステンレス製の板がポルトで固定されている(レントゲン撮影)

リハビリで知った人間の闇

の電車から地下鉄に乗り換えて、当時は銀座の阪急ビルにあった東芝の意匠部、今で言うデザインセンターに通勤していた。近所の日劇までよく歩いて行った。車いすの生活に慣れたため、リハビリが始まり、私は「社会の縮図」を味わう

付くのに時間はあまりかからなかった。

1だ。ところが、その体の内部は何とかっこうが悪いことか。この体内の異物に最初は怒りを感じた。身の回りのモノは何でもデザイン

の。大けがを負い、もう二度と歩けないと医師に宣告された。

ことになった。比較的早く、車いすで階段などの段差を越えることができるようになり、トレーナーからは拍

ンでできるのに、自分の体の中は「かっこう悪い」まま

で、なすすべもない。「美」

入った病院は通勤で使った。私がリハビリのため、その後、私に嫉妬(し

のみを信じる私にとって許し難いことだった。

乗ったタクシーが車に追突され大破したというも、乗いすをつかまれて倒されたりした。事故で生死の境目をさまよう経験をした